

2

コーシネ

新版 増訂

宍山教大人齋齋典



印 影

(西)

四印會

歌 法波 金剛業 經波 舞

金剛法 大日 金剛薩埵

畫 寶波 金剛寶 金波 婦

一印會

大口如來

風天 (佛千劫願) 衣金剛 火天 多聞 梵天 天祥

理趣會

歌 愛金剛 佛金剛 剛愎女金 舞

鑽 剛女金 剛女金 剛女金 鈎

畫 乘 剛女金 剛女金 婦

供養會 (同三昧耶會)

慈 慧 食 月 日

花 (好劫千佛) 羅刹 花 (好劫千佛) 來 (好劫千佛) 香 帝釋

水神 幢寶生光 火神

利 豐 寶 寶 羅 愛 喜

語 彌 陀 法 法 大 日 金 薩 阿 闍 喜

因 歌 樂 舞 王

風 神 護 不 空 牙 地 神

燈 (好劫千佛) 鈴 (好劫千佛) 鏡 (佛千劫願) 瓶 (佛千劫願)

諸頭 招 剛 夜 迦 那 水 天

降三世會 (四同天女外、會同三昧耶會)

天祥 天祥 天祥 天祥 天祥

(北)

(南)

敬細會 (同三昧耶會)

三昧耶會 (內院同成身會)

光無量 賢護 寶鏡 明月 月光 無盡 寶鏡 鈴 金剛 寶賢 鏡

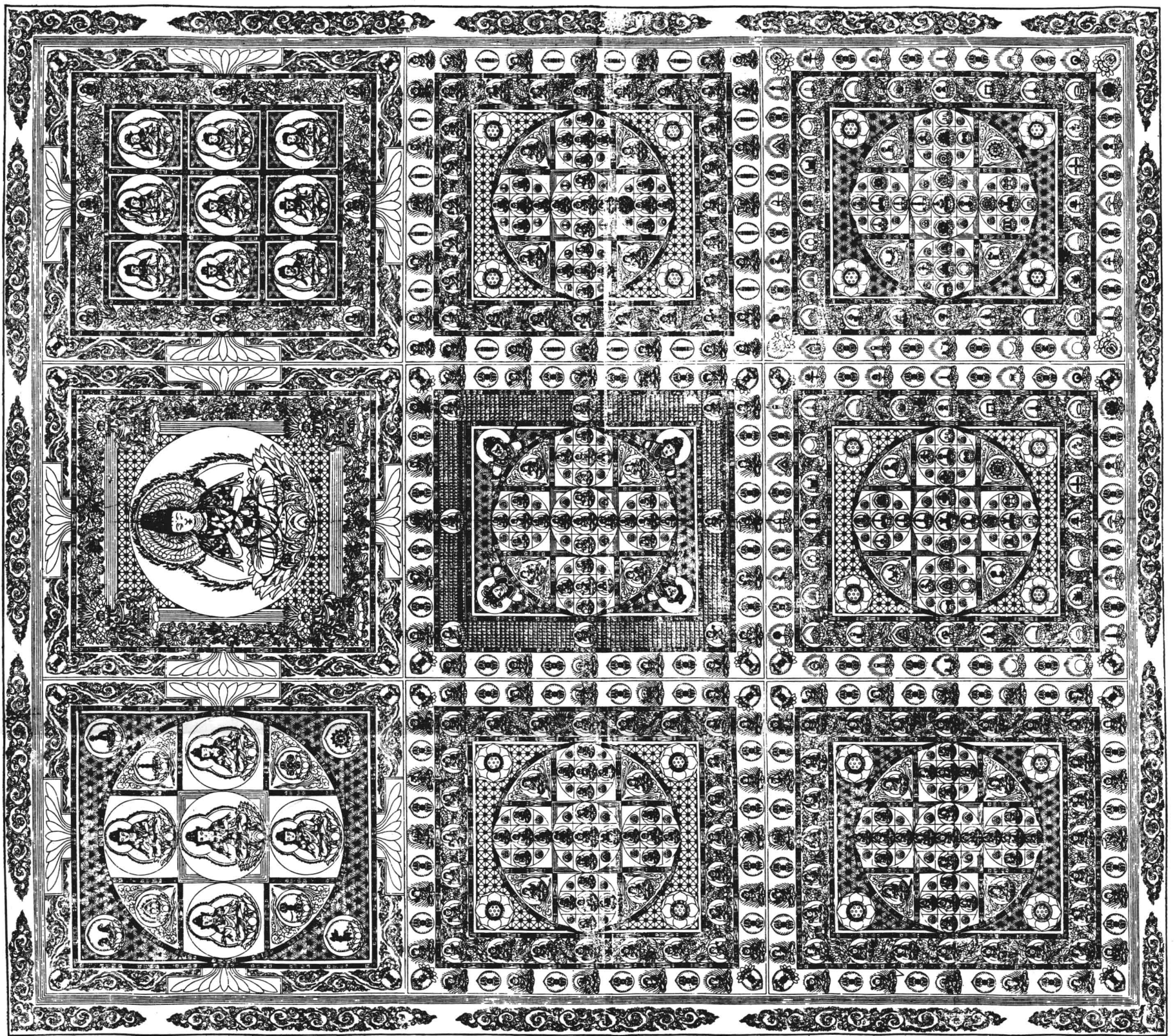
花 智 幢 藏 虛 空 來 大 蓮 精 香 象 香

闍 除 臺 羅 滅 惡 見 不 空 濕 氏

降三世三昧耶會 (同三昧耶會)

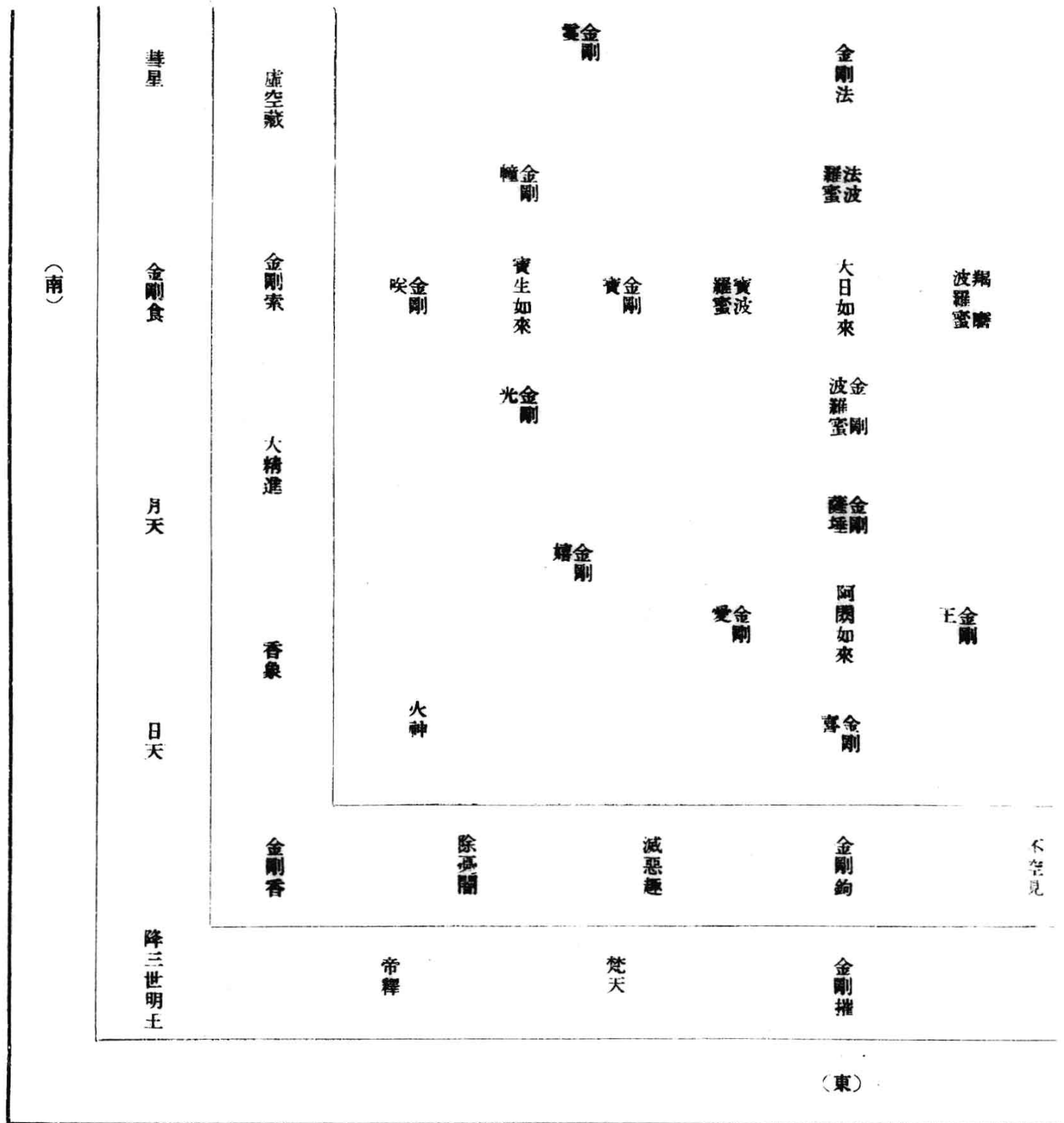
外金剛部二十天同成身會

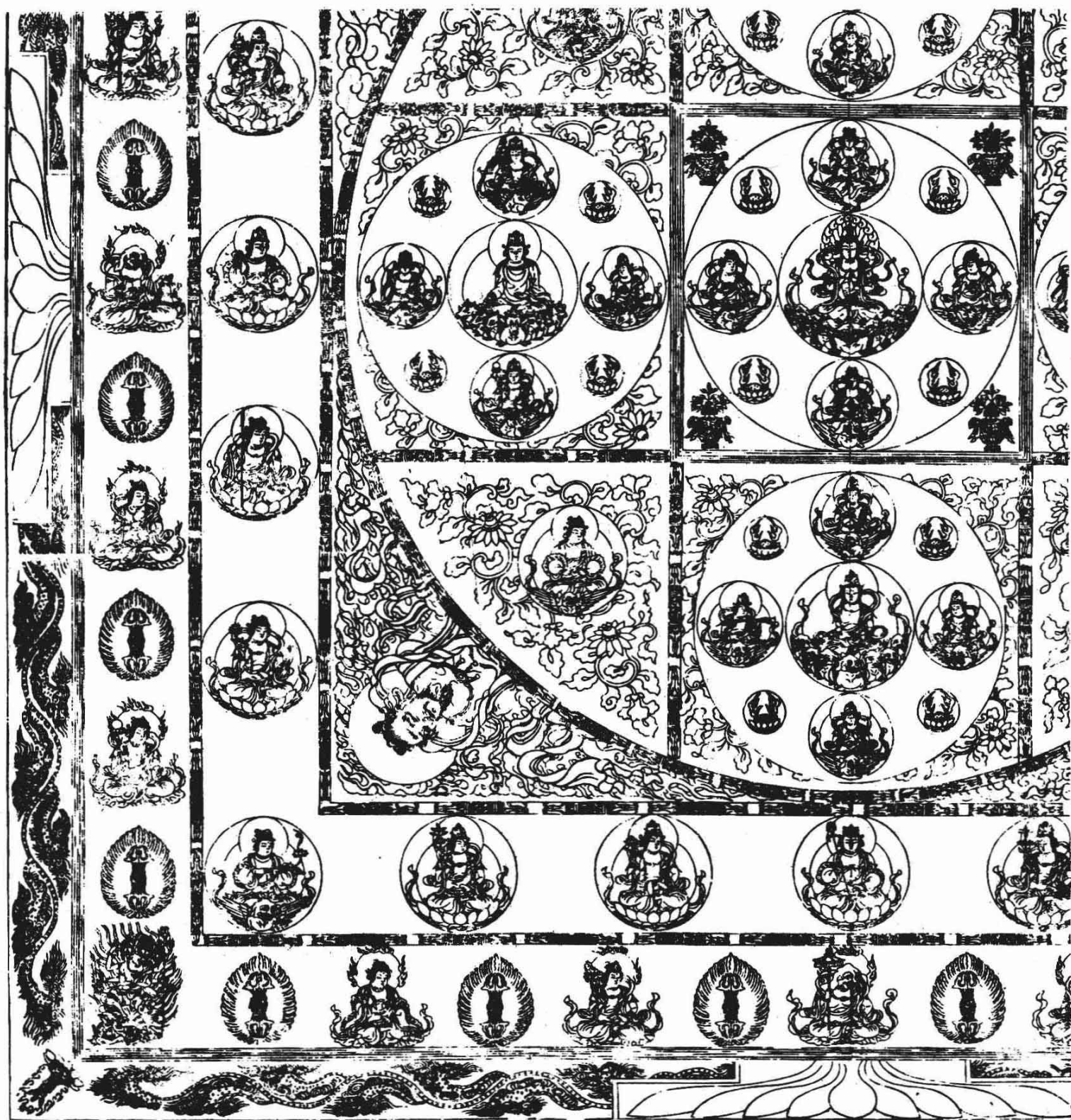
(東)



部一の羅茶曼尊一十八界剛金

(版院法妙)





凡 例

一、本書は東密相傳の眞言密教を主とし、兼ねては天台宗相傳の台密並に修驗道に關する語彙を蒐集し、これに精密なる解説を施すを以て目的とす。

一、本書は本卷五冊附卷一冊より成る。字音によりて五十音順に排列附卷には各種の索引、古來使用の略字・作字・先徳略名・参考書の略名表・補遺等を収録す。

一、本書の解説は主として古來の相傳の説に據ると雖、まゝ新解釋を施せる所なきに非ず。又事相の儀式・修法・作法等は諸流の相傳區々にして詳述すること困難なるを以て、その主として行はるゝものを示し、或は相傳の流派を明示して數傳を並舉せり。

一、項目の配列は五十音順に依り、ンは最後にこれを置けり。但し濁音・半濁音は清音に次ぎ、ヤ行のイエはア行のイエに、ワ行のキウエテはア行のイウエオに、タ行のヂヅはサ行のジズに合したり。同一音にては人名は時代順に列ね、その他はつとめて漢字畫の少きものを前としたれども、前後の關係にてまゝ例外なきに非ず。

一、項目の字音の假名は檢出の便宜上發音のまゝをうつしたり、例へ

ばアウ・アフ・ワウ・テウをオウに、カウ・カフ・コフをコウに、レウ・レフ・リヤウをリョウとせるが如し。但し觀・火等の音は古來の儘を襲用してクワン・クワとし、光等の音のクワウは現時の發音に従ひコウとせるが如き特例あり。又發音が促音等に變化する場合は傍に細字の平假名を附してこれを示せり。例へばホウ^ウシン(法身)・イチ^ツサイ(一切)等の如し。音便も亦此例によれり、例へばクワン^ンオン(觀音)・イチ^ンエ(一印會)等の如し。但しガツシヨウ(合掌)の如く通俗化せるものは往々變化せるまゝの音を寫したるもあり。又古より慣例あるものは字音によらずして其慣例に従へり、例へばバザラ(跋折羅)の如し。されば語彙を檢出せんとする時は附卷の索引を利用するを便とす。

一、名稱同一にして而も部類等しきものは(一)(二)(三)等の符號を附して之を列舉し、部類異なるものは別項目を標出せり。但し人名に限り項下に生寂年記入の便宜上同名にても各別に標出せり。

一、人名は多くは諱に依りて標出したれどもまゝ字を用ひたる者無きに非ず。人名の下に記入せる數字は總て西曆にして生寂年又はその生存年代を示す。

一、項目の下に挿入せる歐字は梵語を示す。その然らざるものは、巴(巴利語)・藏(西藏語)等の文字を置きて之を區別せり。本文中の音

譯・義譯の語に挿入せる歐字亦これに準ず。

一、口繪には主として密教寺院所藏の靈寶名什古建築を収録して、鑑賞と解説補助の便に供し、挿圖は間々優秀なる名品を加へたれども解説補助を主眼とせり。佛像は經軌の所説に合致せるものを主とし比較研究の資料として往々軌前の像及び顯教式・西藏式又は管見の像を加へたり。

一、口繪は佛像・肖像・文書・法具・堂塔と次第し、大途音順に排列せり。但し圖版の調和を考慮して順序顛倒せるものなきに非ず。又玻璃版を前とし銅版を後とせり。

一、解説文に↓とあるは、その下に記せる項目にゆづり、或は参照せしむることを示す、例へば第一頁下段に(↓阿字本不生)とあるは阿字本不生の項を見よと言ふ義なるが如し。又*印を付せるは「佛説」の二字を省略せることを示す。

一、經軌・書籍の解題中、末尾に藏經・全書等の名を列ねたるはその書がこれに収録せられたることを示す。又項末括弧内の書名は参考書なり。

増補訂正について

一、本文においては、できるかぎりの誤字・誤植等の訂正をしたが、正せないものは、追加補足と共に別表にまとめた。また梵語・西藏語等の訂正も別表にした。

一、年號は皇紀を西曆に變えた。

一、新しく付録として略年表・印相圖・陀羅尼・密教關係論文目錄・血脈系譜・密教經典目錄等を加え、舊版各卷に掲げられていた圖版及び索引と共に別卷として用いやすくした。

種智院大學密教學會内

密教大辭典再刊委員會

委員 佐和隆 研

村主 恵 快

高井 隆 秀

高藤 圓 應

月輪 賢 隆

鳥越 正 道

夏目 祐 伸

松尾 義 海

コ

コアジヤリ 小阿闍梨

結縁灌頂小壇の阿闍梨を云ふ。小灌頂阿闍梨とも名け略して小阿と稱す。

【作法】小阿闍梨は衲衣を着け、三衣及び香爐を十弟子に持たしめ、又は自ら持ち、庭上進列・還列の時は大阿闍梨の後に列り、中筵道を歩む。往古は大阿の後に小阿立列することなし、中古仁和寺等に始めて行ひしもの、如し。醍醐には古今ともこの儀なきを本儀とすれども、近來他流に準じて用ふるに至れり。三昧耶戒場にては大阿入堂登高座に引續き、小阿入堂着座す。その座席は流派によりて異れども、西院流等は多く小阿は禮盤の西南方に、大阿の平座と南北にて相對し、北向に一疊臺或は半疊を設け、前に居箱・香爐箱を置く、草座は豫め之を敷き置く。小阿は三昧耶戒の間別に所作なし。内庫にては供養法の散念誦畢りて大阿下禮盤、平座に着し、入壇の諸用意畢らば小阿闍梨は當界の後を経て小壇の椅子に着す。受者に塗香を與へ、五股を授け、得佛の印明を授くる等各流に小壇作法あり。諸流多く小阿闍梨は片壇師を兼ねと雖、西院流等は兼行せず、片壇師は持金剛衆の中にて之を勤む。

ゴアノミヨウ 五阿明

阿明・阿明・阿明(阿は又阿・明に作る)の五字にして胎藏法の眞言なり。阿明・阿明・阿明・阿明・阿明とこの五字明とは總別開合の相違の故に經軌に或は四字明を説き、或

は五字明を説く。此の五字明は根本の阿字より次の三字を生じて四字を成じ、四字惣合して阿の一字を成ず。四字共に阿字の轉生の故に五阿の明と名く。大日經三悉地出現品云、以一音聲四處流出、普遍一切法界、與虛空等無所不至、眞言曰(中略)阿阿阿阿阿阿、大疏十一に釋して以「一音聲四處流出也、謂從阿字出三字成四字、此四合爲一而遍布一切處也」といふ。此五字は發心・修行・菩提・涅槃・方便究竟の五轉、大圓鏡・平等性・妙觀察・成所作・法界體性の五智、阿闍・寶生・阿彌陀・不空成就・大日の五佛を表す。大疏十四に又此阿有五種、阿阿長暗惡惡長といひ、前四字を釋し畢りて次に第五字に就き、其惡長一字は方便輪、所以中無也、此是釋迦佛輪也といふ。又如從阿字一字即轉生四字、謂阿是菩提心、阿長是行、暗是成菩提、惡是大寂涅槃、惡長是方便と釋し、三種悉地軌には其四方葉中、初阿字在東方、喻菩提心、最是萬行之初也、黃色是金剛性、其名曰寶幢、亦名阿闍佛。次阿字在南方、是行、赤色火義、即同文殊之義、即是華開敷、亦名寶生佛。次阿字在西方、是菩提也、萬行故成、等正覺、白色即是圓明究極之義、又是水義、其佛名阿彌陀也。次阿字在北方、是正等覺果、其佛名鼓音、是釋迦牟尼也、即是大涅槃、迹極還本故涅槃也、佛日已隱、於涅槃山、故色黑也。次即入中覺、惡長字是方便、即知此心法界之體、本來常寂滅相、此是毘盧遮那本地之身、華臺之體、超八葉、絶方處、非有心之境界、唯佛與佛乃能知之等と釋す。此の四字又は五字の明を胎藏大日の眞言とするは此の四字を終りに附せる大咒を廣大軌には大日眞言、玄法軌には無所不至眞言と名け、大疏十一に此四字是此一部經中正宗體也、一切祕藏皆從此生、即是毗盧遮那佛心也と説けるによる。然れども瑜祇經序品には此

の四字を以て法利因語の四菩薩の眞言とし、理趣釋經には此四字是毘盧遮那佛自覺聖智四種智解脫、外現四大轉輪王菩薩所謂第一金剛薩埵、第二金剛寶菩薩、第三金剛法菩薩、第四金剛羯磨菩薩是也と説きて薩寶法業の四菩薩の眞言とす。是れ別しては大日、通じては五智五佛乃至一切諸尊に互るが故なり。委細の釋は性心の印明訣六に出づ。(大日經疏・三種悉地軌・印明訣等)

ゴイ 五位

大乘の行者修行轉昇の五階級にして、十信・三賢・九地・因滿・果滿の五位なり。これ四相の惑品を斷ずる始覺能斷の智を淺深に依りて五分したる位階なり。釋論の法相によれば、第一の十信位は信心乃至願心の十心なり。此位に四相中最も麁なる滅相を斷ず。第二の三賢位は十住・十行・十廻向の三位なり、此位に異相を斷ず。第三の九地位は十地中の前九地なり、此位に住相を斷ず。第四の因滿位は第十地なり、生相の麁分を斷ず。第五の果滿位は佛果にして、生相の細分と無明を盡し、四相都無究竟清淨なる位を云ふ。本論たる起信論は生住異滅の四相に因みて四位を樹て、今末論たる釋論に五位を開くは、生相に麁細二分の惑ありて、麁分は因位に斷じ細分は佛果に之を盡すと説きて生相を斷ずる上に因果二位を分つが故なり。五位の中初二は地前にして、この位に初僧祇を滿じ、後三は地上にして、この位に第二三僧祇を滿ず。又斷惑の行相に依つて五位に四事三事あり、四事は五位の前四位に各具し、三事は第五位のみにあり。四事とは一に趣向行者、能修の行人なり。二に修行因相、位に隨ひて小異ありと雖も當位々々の修行の規則を云ふ。三に行因果相、當分の果を云ふ。四に熏離俱相、當分の惑を斷ずと雖も猶後位の惑

を帶するを云ふ。次に三事とは一に能圓滿者、能覺の人を云ふ。二に對治行相、生相の細分並に無明を斷ずるを云ふ。三に滿究竟相、圓滿究竟の位を云ふ。此の三事は四事に相當す。今五位各々につきて廣く明さば第一に十信位の凡夫は能修の人に於て、是れ趣向行者なり。其の滅相を覺るを修行因相とし、治道を犯すを行因果相とす。治道に依て滅相の礙止息すと雖も、猶後位の惑(異住生の三惑)を帶するが故に此を熏離俱相とす、是れ五位中第一位の四事なり。第二に三賢位の菩薩と二乘とは是れ趣向行者なり。異相人執の惑を斷ずるを修行因相とし、第六意識相應の二執の中、塵分人執を遠離するを行因果相とす。而も二乘の人は三賢の空に相似し、三賢の菩薩の法空淨心地に似たりと雖も、相似覺にして眞覺に非ず、從つて猶後位の惑を帶す、是れを第二位の熏離俱相と云ふ。第三に九地の菩薩は趣向行者なり、轉・現・智相・相續の四種の住相を覺るを修行因相とし、住相塵念の相を離るを行因果相とす。住相四種の惑を斷ずると雖も未だ生相の細念を離れざるが故に此を隨分覺と名け、熏離俱相とす。第四に因滿位に於て因圓滿者は趣向行者、その生相中の俱合動相を覺るを修行因相、斷ずるを行因果相とす。而も猶獨力業相と根本無明とを具足せるを熏離俱相とす。第五に果滿位に於ては三事あり、即ち果圓滿者は能圓滿者、能力業相と根本無明とを遠離するを對治行相とし、後位の惑の帶すべきものなきを滿究竟相とす。(釋論三・同慈行鈔二・同通法疏三・同普觀記三・同快鈔三本八)

ゴイカイゴウ 五位開合

釋論第三に依彼四相・明・覺差別・即有五位と説くに

就きて、此文は何事を顯すやを論ず。東密新義派に用ふる論題。問者は四位を顯すと構へ、答者は五位なりと成立す。(↓五位)。

問者 論釋の次第を案するに、所對治の妄染につきて能治の次位を開く、今の所治四相なるが故に、能治亦四位にして五位なるべからず。又本論の中に斷位の初めに如字を置きて位々の不同を顯す時唯四處に限る、若し五位を有せば五處に如字あるべし。

答者 論第四六染の釋に六者根本業不相應染、依菩薩盡地得一人如來地能離故と説きて、業相因果二位に通ずる義を明せり、何ぞ生相のみ一位に局るべけむや。此字句中自有二人の論釋と彼と相契へり、生相の斷位に二位あるが故に開きて五位となす。但し難勢四箇の如字に就きては、四處に之を置くとも雖も因果二位合し難きが故に生相に二位を開きて、一位とせざるのみ。(釋論第三重四・啓蒙四上)

ゴイサンマイ 五位三昧

五種三昧道の異名。大疏七云、如三重曼茶羅中五位三昧。皆是毘盧遮那祕密加持。

コイケボウ 小池坊

豐山の本坊。長谷寺觀音堂西の岡上にありて妙音院とも云ふ。もと紀州根來に在りし學頭坊にして、賴譽能化此院を開きしが、其傍に小池ありしを以てこれを小池坊と呼べり。天正十三年根嶺破滅後は長谷寺に移り新義の學寮となれり。即ち同十五年專譽能化は豐臣秀長の外護によりて長谷寺に晉住し、名を小池坊中性院と改めて中興第一世となる。↓長谷寺。(豐山傳通記中)

ゴイシユバン 互爲主伴

曼荼羅會場の諸尊自受法樂の爲めに各自内證の三密法門を説く時、能現の尊と所現の聖衆と互に主となり伴となるを互爲主伴と云ふ。

コイチゴウビヨウケンチウウ 舉一後有並兼中有

略して舉一後有とも題す。釋論五立名略示門の釋段に、一眞三妄如、是四法能作三熏事一本數名字、今此文中學一後有並兼中有とあるに就きて、兼ぬる所の中有は轉相を指すや否やを論ず。東密古義派諸門・新義派等に用ふる算題。難方は轉相を兼ぬと云ひ、答方は廣く事識支末妄心を兼ぬとなす。

難方 舉一後有並兼中有と云ふ意、三細に於て初後の業識と現識とを擧げて中間の轉相を兼ぬる意なり故に通法は於三細中學初及後兼有轉相と釋せり。

答方 凡そ此文は一眞三妄の四法を擧げて、之に染淨一切の法を盡す意趣なるが故に、眞如の一を擧げて妄心を兼ぬ、無明の一を擧げて枝末を兼ぬ、業識の一を擧げて事識を兼ぬる義にして、轉相を指すに非ず。從つて慈行は業識中兼事識、無明中兼支末、眞如中兼妄心と釋し、文を擧一後有並兼中有と讀めり。(釋論十二鈔五・愚案鈔十・指南鈔鈞物五・愚草五上・百條第三重六・啓蒙六下本)

コイチジイチ 舉一示一

一法を擧げて他の一法を例示するを云ふ。例へば小野流の血脈に金界八代胎藏七代を示して金胎共に八代等葉と七代等葉との二傳あることを示すが如きを舉一示

一と云ふ。釋論二云、學一兼一影示而已。

コイチゼンシユ 舉一全收

一分を擧げて全體をこれに收むるを云ふ。華嚴五教章中に三性一際學一全收とあるが如く、本來華嚴學者等の用ふる術語なるも往古より密教學者もこれを用ふ。

ゴイン 吳殷 八〇六の頃

大唐青龍寺惠果和尚の俗弟子。德宗の貞元年中和尚に隨つて學法し、金剛界大法を受く。永貞元年十二月惠果入寂するや、元和元年正月三日、大唐神都青龍寺東塔院灌頂國師惠果阿闍梨行狀を撰述す。付法傳二に收む。四衆合會悲感動天、于時有山人逸士吳殷略修和尚行狀といへり。(惠果行狀・海雲血脈)。

ゴイン 五音

聲明の基本音階の名稱。聲明の音聲は何人にも通じて一定の音位のもとに表る。この音位を五階段に分ち、之に宮・商・角・徵・羽の名を施して五音と稱す。五音の稱は古來支那日本に於て雅樂等一般に音の高低を示すに用ひらる。而して古來五音は一切音聲の大本源にして、金石絲竹匏土革木より人天鬼畜禽獸蟲魚の音聲に至るまで一切網羅して五音中に攝盡すと稱す。五音のなか宮を以て主音(五音中の基礎音)とし、商角徵羽と漸次高く昇る。尚高き音は更に第二層・第三層の五音等際限なく反復し、低き音亦五音を反復して層を立つ。進流聲明にありては初二三重十一位とて第一層を初重、第二層を第二重、第三層を第三重とし、その中低きより高きに及ぶ十一音を選び、都合十一位の音階を以て諸種の聲明を唱ふ。その十一位とは初重の

五調子	五佛	五智	五方	五色	五行	五季	五臟	五處	五味	五根	五塵	五觸	五穀			
宮	一	越調	呂	大日	法界	中央	黃色	七音	土用	脾臟	喉	甘味	意根	觸	重	黍穀
商	平調	呂	彌陀	妙觀	西方	白色	金音	秋季	肺臟	齒	辛味	鼻根	香	輕	糯穀	
角	雙調	呂	阿闍	大圓	東方	青色	木音	春季	肝臟	牙	酸味	眼根	色	堅	胡穀	
徵	黃鐘調	律	寶生	平等	南方	赤色	火音	夏季	心臟	舌	苦味	舌根	味	煖	麥穀	
羽	盤涉調	律	釋迦	成所	北方	黑色	水音	冬季	腎臟	脣	鹹味	耳根	聲	冷	大豆	

微羽二音・二重の五音・三重の宮商角徵の四音にして、初重の宮商角・三重の羽は有位無聲とす。有位無聲は器樂をからざれば人聲にて發音し得ざる位なり。聲實抄所引の九呷十紐圖には、口を合して音を同くするを宮、剛柔俱に張るを商、喉中に確確たる音を發するを角、唇を分ちて齒を切るを徵、唇を勇めて背の如くするを羽といふと説けり。又五音を五佛五智等に配することあり。上表の如し。五佛五智等に配することは音階に直接關係なきも、五音によりて此等の法を表象し、聲字即實相、聲明即實相の旨を示し、萬象を攝して聲塵世界を現出せんとする宗教的意義を表示せるなり。↓五音博士。(魚山叢書集・聲實抄・聲明口傳)

ゴインクシヨウ 五音九聲

聲明音階法の名。五音とは聲明音階の基礎音たる宮商角徵羽の五音。九聲とは五音と、此の五音より開きたる變徵・變宮・揚羽・揚商の四音(又は四聲)とをいふ。變徵・變宮は呂曲の徵・宮の半律ト音にして、揚羽・揚商は律曲の羽・商の半律上音なり。四聲は共に五音より開きたるものなるを以て、五音と九聲とは開合の相違にして合すれば五音、開けば九聲となるのみ。

ゴインシチシヨウ 五音七聲

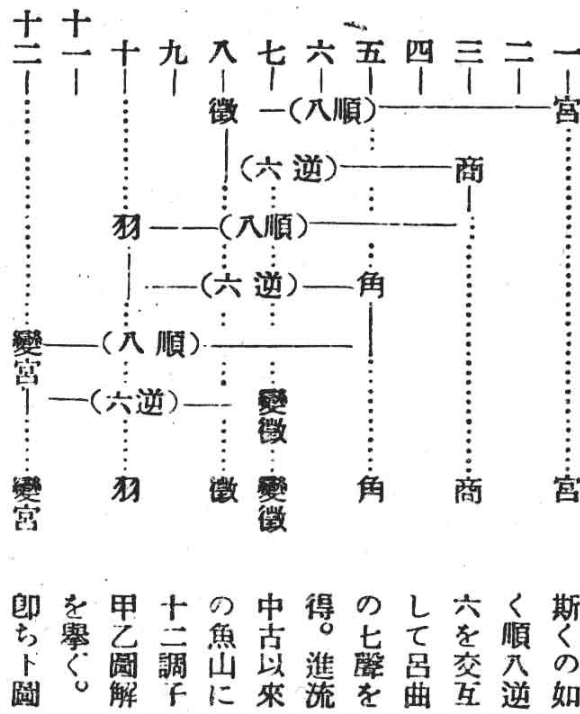
聲明音階法の名。五音とは聲明音階の基礎音たる宮・

商・角・徵・羽の五音。七聲とは呂曲並に律曲の音階を指す。即ち呂曲(呂旋法)の音階は五音より更に變徵・變宮の二音を開きて、宮・商・角・變徵・徵・羽・變宮の七聲にて構成せられ、律曲(律旋法)の音階は五音より更に揚羽・揚商の二音を開きて、宮・商・揚商・角・徵・羽・揚羽の七聲にて構成せらる。その一連の音階を夫れ／＼呂の七聲、律の七聲と稱す。呂律各七聲あれどその主體たるべき音は五音なり。抑も呂律の曲とは五音と十二律との關係より生ずるそれぞれの音律旋法にして、五音の音階法に於ける二様の形式なり。今呂律兩曲の五音七聲を表示せば次の如し。

十二	上	神	盤	鸞	黃	冕	雙	下	勝	平	斷	一
律	無	仙	沙	鏡	鐘	鐘	調	無	絕	調	金	越
呂曲	宮	變	羽	徵	變	徵	角	商	商	宮		
律曲	羽	揚	羽	徵	角	商	揚	商	宮			

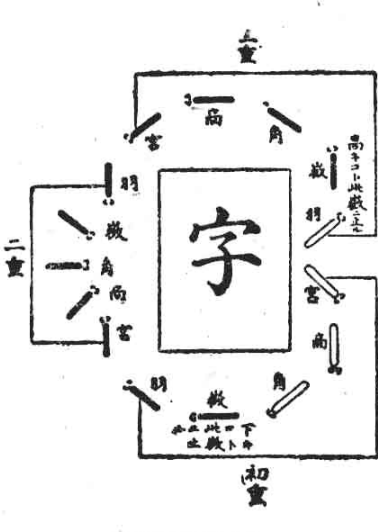
十二律の各々の有する音は半音にして、一律の間隔を有するものは自度と合して一音の差、二律の間隔を有するものは自度と共に一音半の差となる。此の音階は、先づ十二律に基礎音たる五音を配當する時は或は一音、或は一音半を隔て、之を唱ふるに音律の變化上柔軟味を缺くを以て、各音の間隔と變化とを一定し、音律の妙味を出さんが爲に變徵・變宮・揚羽・揚商の四音を開くに至りしなり。而も此の制定には一定の法則ありて、聲明道にては常に之を順八逆六と稱

し、支那の三分損益法より來れるものなり。先づ順八逆六によりて呂曲の七聲を求めんに、十二律何れの音を宮と決定し、上へ下へと、順に入つて逆に入つて六つ繰返して之を得。即ち宮を決定し、宮より順に入つて六つ繰上つて徵、徵より逆に入つて六つ繰下つて商、商より八つ繰上つて羽、羽より六つ繰下つて角、角より順に入つて八つ目を變宮、變宮より逆六して變徵とす。



ゴインハカセ 五音博士

又十五折博士と名く。宮商角徵羽の五音を初二三重に配して得る十五音を、豎線・斜線・横線を用ひ、位置の關係を以て之を表し、以て梵唄に附したる音譜をいふ。往古は簡單なる譜博士を用ひたりしが、進流の祖宗觀より六代の孫弟たる高野山金剛三昧院證運房覺意此圖を案出し、爾來山中の學徒譜博士を改めて此圖を寫傳し、以て現代に及ぶと傳ふ尤も五音博士圖の作者に五人あり、謂く如圓



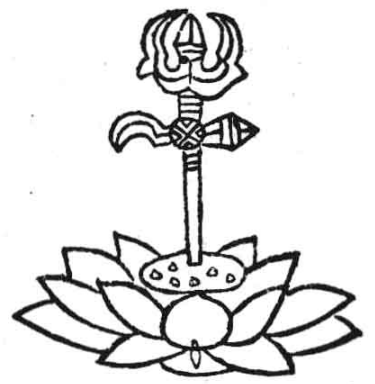
性如(イ妙)・里觀・淨名・證運、此中四人の傳は失はれ、證運房覺意の傳のみ廣く世に行はるゝに至れりといふ。或は覺意の資圓深の作なるべしとの説あり。魚山藝芥集には此の五音三重圖をまとめて上圖の如く圖せり。墨譜は有位有聲、白譜は有位無聲を示す。

コウ 香 Gandhah

香氣に富める樹脂・木片・根・葉・花果等にて作れる薫物なり。之を用ふれば惡氣を去り、心識を清淨ならしむ。仍りてこれを佛に供養し、又は行者の所用とす。香に焚焼用と塗布用とあり。前者を燒香と名く、これに丸香と抹香とあり、抹香は散香とも云ふ(↓燒香・丸香・抹香)。後者を塗香と名く(↓塗香)。香には沈・檀・甘松・丁・鬱金・龍腦・兜羅(Turaska)・多磨羅(Tamal)・樟腦・安息・白膠・薰陸・蘇合・茅根・首宿等多種あり。燒香塗香共に一種若しくは數種を合せ用ふ。修法の種類、本尊の部類によりて供養の香を異にすること、蘇悉地經上塗香藥品及び分別燒香品を始め、髻鬘經中・尊勝軌・大疏等に説けり。

コウ 鈎 Ankucam

梵に盜句奢と云ふ。本來は武器の一種なれども、密教には佛菩薩等の方便智慧鈎召の徳を表示するに用ふ。これに金剛鈎(三股鈎)・五股鈎・獨股鈎・雙鈎等あり。諸尊所持の三昧耶形中には特に蓮華上にこれ等の鈎を安置せるもの多し。金剛鈎は尖端三股杵の鈎なり、金剛界金剛鈎菩薩・胎藏界金剛部院・金剛鈎女菩薩等の三昧耶形にして、金剛界の金剛面天・胎藏遍知院の大安樂不空眞實菩薩・同虛空藏院の不空鈎觀世音菩薩・同外部院の鳩摩羅天等これを所持す。五股鈎は尖端五



三股鉤

股杵の鉤なり、獨股鉤亦これに準ずべし。胎藏虛空藏院の金剛藏王菩薩同釋迦院摧碎佛頂等獨股鉤を所持す。双鉤は金剛鉤を二本並べ樹てたるものにして金剛王菩薩の三昧耶形等にあり。

コウ 講

講義の略稱。經論の講義を始むるを開講と云ひ、其終了を滿講と稱するが如し。従つて學徒相集りて經論の講讀を爲すことを直に講と名く。又經典を講讀し、法義を讚嘆し、或は本尊・祖師の功德を讚揚する法會を講と名く、最勝講・法華八講・不動講・愛染講・地藏講・觀音講・太子講・大師講・涅槃講・舍利講・佛生講・光明眞言講等の如し。此等諸種の講は平安朝の頃より佛教各宗に通じて盛に行はれたる法會にして概ね一定の儀式を有し、其席上にて表白文を朗讀するを常とす。其表白文を講式と名く。又此種の法會に參詣し、或は靈山・名利等に參拜し、又は奉迎寄進を作すための信者の組合をも講或は講社と名く、伊勢講・御嶽講・燈明講等の如きこれなり。而して此等の組合員を講中・講員と稱し、其出資金を講金と稱す。俗間に金錢融通のために設けたる無盡講・賴母子講等は此種のものより轉化せるものなるべし。(安齋隨筆九・鹽尻十三)

コウ 響 十諭の第六。↓十緣生句。

コウア 弘阿 一八五八

コウ

京都大通寺第七十一世長老。字は秀惠、智積院弘基の弟子にして事教に精通し、弘潤の後を繼いで大通寺の席を董す。安政五年六月二十二日寂す、壽缺ぐ。嗣法に秘迹あり。著作に結緣灌頂乞戒導師作法・雙身毘沙門天浴供私記(台密)・雙身許可作法私記(台密)・正嫡相承祕書各一卷あり。(大通寺過去帳)

コウ アンキ 弘安、記

二卷、一圓上人賢爾記。弘安九年正月二十八日慈尊院榮尊が勸流の行軌によりて寛高に授けたる傳法灌頂記なり。

コウ イ 弘意 一四〇三

醍醐山慈心院大僧都、同院俊憲の瀉瓶を得て松橋の第三十二祖となり、大僧都に任ず。應永十年七月六日寂す。付法に顯祐あり。(傳燈廣錄中)

コウ イン 鉤、印

金剛鉤印とも云ふ、金剛界四攝菩薩の一たる金剛鉤菩薩及び胎藏界金剛手院の金剛鉤女菩薩の内證三昧を表示する印契なり。諸佛菩薩等大悲力を以て衆生を鉤召し佛道に引入する功能を有す。又行者修法の時道場に聖衆を請召せんとする時此印を結ぶなり。此印と共に誦する眞言に種々あり、或は如來鉤の明を用ひ、或は金剛鉤菩薩の羯磨會眞言又は三摩耶會眞言を唱ふ。↓金剛鉤菩薩・如來鉤。

【印相】 異相多し、今主要なるもの二三を擧ぐ可し。(一) 二手内縛、右頭指を舒べ上節を屈す。これを大鉤召印と名く。要略念誦經云、以二手十指一向内相又作金剛縛、豎右頭指、由如鉤形と。大日經密印品。

胎藏四部軌・諸次第等亦同じ。(二) 二手外縛し、右頭指を立て上節を鉤屈す。大日經供養儀式品・攝眞實經上等に二手金剛縛に作し智慧(右)手の風輪(頭指)を舒べ上節を屈すと説けるに據る。金剛縛は普通外縛を指すが故に、果實の胎藏次第要集記等に外縛と見て此説を立つるなり。(三) 二手内縛して二頭指を立て屈して鉤の如くす。金剛童子軌に此説を出す。(四) 二手内縛して二大指を並べ立て屈して鉤の如くす。薄草紙等に之を五大虚空藏の總印とす。

コウ イン 興胤 一三九四 一四二八

勸修寺長吏。後安養院殿と稱す、常盤井彈正尹滿仁親王の子にして、前長吏尊興の舍弟なり。應永元年生誕す。夙に尊興の室に入りて得度し、大僧都に任じ法印となる、同十八年二月東大寺別當に補せられ、東南院修造料として大井の庄を賜ふ。二十年尊興に隨つて傳法灌頂を受け、又慈尊院の興繼を請じて法流を瀉瓶し、三十二祖となる。詔して僧正に叙し、應永三十一年五月第十九代長吏に補し、大僧正に進む。正長元年五月二十七日寂す、壽三十五。(傳燈廣錄下・勸修寺長吏次第・諸門跡譜)

コウ エ 光惠 一七二一の頃

智山の學僧。平戸光惠といひ、傳歴詳ならず、正徳元年傳法灌頂根岳記一卷を著す。(智積院誌)

コウ エ 香衣

香染の衣とも云ふ、香木の樹皮・根・葉・果實等の煎汁を以て染めたる法衣なり。普通木蘭色即ち黃褐色なりと雖、青黃赤湘を香衣の四色と稱せし時代もあり。香衣

は勅許による法衣にして紫衣に次ぐ。法然上人白河法皇の召に應じて仙洞に往生要集を講じ、圓頓戒を授け奉る時、上人の號と香衣とを賜ふ。これ我國香衣勅賜の濫觴なり。上人位は律師に相當す。仁和寺法親王は永宣旨により奏に準ぜずして香衣を其徒に許す旨顯密威儀便覽に見ゆ。密教には賜香衣の僧尠からず。(佛像標幟圖說乾・顯密威儀便覽上等)

コウエイ 弘榮 一七四四 一八三〇

高野山如意輪寺の學僧。字は定俊房、俗姓佐藤氏、阿波川田山久宗の人なり。寶曆六年三月二十一日州の醫光寺龍昇の室に入りて雜染し、同七月高野山に登り、如意輪寺弘道に就いて四度加行を修し、兩部の密灌を受く。二十一歳交家以來顯密の教風を扇ぎ野澤の法流を汲み、殊に普門院廉峰に隨ひて梵曲を學び、聲明業に練達せり。安永三年七月梅雲院に住し、後に乘藏・功德聚・龍花・南室の四院を兼ね、天明四年如意輪寺に移る。文化十三年十二月高野山第三百四十一世寺務檢校に補し、治山一箇年、同十四年十二月職を辭し、文政十三年八月二十日寂す。壽八十七。著作に無常導師法則あり。(紀伊續風土記三十三・聲明系譜)

コウエイ 弘榮 一八四一 一九二一

高野山親王院の學匠。俗姓水原氏、能登國鳳至郡柳田村丸山勝兵衛の長男なり。天保十二年六月二十日生る。弘化四年同郡金藏寺榮徹の室に入りて雜染し、安政元年高野山増福院常賢に隨つて中院流の灌頂を受け、同二年高野山補陀洛院有圭を拜して阿闍梨位灌頂に浴す初め郷里にあるや高木信胤の塾に入りて漢學を修め、安政四年四月笈を負ひて高野山に登り、親王院に寓し

て入寮す。時に山内は巨匠碩學雲の如く講論頗る旺なり、諸匠に従つて宗乘・法華・華嚴等を學び、又悉曇・聲明・事相を究め、研鑽懈る所なし。元治元年十一月證菩提院に住し、萬德院に移り、明治四年十二月善集院に於て雲照に就いて苾芻戒を受く。同五年十一月五坊寂靜院に轉じ、同六年九月親王院に轉じ、同八年十月訓導に補す。同十二年一月中講義、同二十二年一月中僧都、同二十五年九月勸學會一職、同二十六年大僧都、同十二月學頭、同三十一年六月少僧正等に歷補し、三十二年七月正智院に轉住し、親王院・蓮金院・報恩院を兼務す。三十三年十二月權中僧正に補し、三十五年三月聯合大學林事相聲明阿闍梨を囑託せられ、三十七年八月推されて寶性院門主に進む。次いで權大僧正二等教師・定額位に補せらる。又宗務所參務・宗務所顧問等に任じて宗務を執掌せり。師能く事相法會法談の故實に通じ、又聲明道の蘊奥に達し、常に後進を誘導して倦まず、衆徒の敬重深かりき。明治四十四年六月六日寂す、壽七十一、臘六十五。(親王院通信)

コウエン 皇圓 一二二二の頃

比叡山の學僧、皇圓は俗姓藤原氏、道兼四世の孫、三河守重兼の長子なり。叡山に登り杉生の皇覺に従つて剃髮し、師事して天台を學び、成圓に密教を受け、學解を以て聞ゆ。常に功德院に住して開講し、門下少からず、就中源空最も著名なり。傳へ云ふ、皇圓大蛇長壽の身を受け、慈氏の出世を待たんが爲に居を遠江國笠原櫻池に卜し、池水を得て手中に掬し、觀想を凝すの時、忽然として寂す、かくて蛇身に化し、月明の靜夜、水底に鈴磬の音を聞くといふ。皇圓頗る史才ありて扶桑略記三十卷を著す。壽及び寂年を缺く。(本朝高僧

傳六十六・淨土傳燈錄・法然上人行狀畫圖三十)

コウエン 高演 一八四四

醍醐寺座主、後自在院と稱し、童名理君、鷹司右大臣輔平の息なり。年十三にして得度し、理性院某觀に傳法灌頂を受け、天保二年東寺長者に任じ、同五年准三



(藏院寶三)像畫演高

后に任ぜられ、牛車の宣旨を蒙る。學德一世に高く、晩年一言寺の南方に省耕庵を營み、大いに當代の文人墨客と交遊せり。弘化元年正月十六日寂す。著作に弘法大師傳四卷あり。(醍醐寺略史)

コウエン ホウケギ 講演法華儀

二卷、圓珍撰。具に入眞言門住如實見講演法華略儀と云ふ。顯密二教の立脚地より法華三部經(無量義經・妙法蓮華經・普賢觀經)の大意・題釋・各品の大綱を述ぶ。台家の釋と密教の釋と二重に説けり、但し天台の釋は往々台家祖師の書に譲りてこれを省略す。貞觀九年六月延曆寺講堂に於ける講演の筆録なり。元一卷なりしが安永五年開版の際、三井の敬光其底本とせし播州大山寺藏蓮寂所寫本に準じて二卷とす。寛文五年刊・安永三年刊・天台小部集釋・佛教全書二十七・智證全集三・

日藏四十一合密章疏一。

ゴウエンマンソン 降閻魔尊 Yamantakan

梵語の閻魔德迦を譯せるもの、即ち大威德明王なり。

コウオウギヨウ 香王經

香王菩薩陀羅尼咒經の略名。

コウオウクワンオン 香王觀音 ↓香王菩薩

コウオウボサツ 香王菩薩 Gandharajah

此尊を或は菩薩部とし、或は觀音部とす、故に香王觀音とも名く、その陀羅尼に觀自在に歸命する句あれば觀音部とすべし。【形像】身白色面貌端正、天冠瓔珞あり、右手垂れて施願にす、その五指端に甘露をふらし



載所記雜尊別

て五道の衆生に施す義なり、左肘を屈め手を左脇にあて、蓮華を把る、その華白紅色なり、脚下より蓮花生ず、その花また白紅色なり。項背に圓光あり、上に傘蓋あり。五色の錦綺を衣服とす、赤黃兩重の珠條を膊上に絡ふ。右手の下に三五の黒鬼あり。【種子】(sa)

コウ

又は(ka)、梵名の頭字なり。【三形】蓮花、觀音部の通三形。又は寶器、増益の本誓を表す。

【印契】八葉印、又は寶器(鉢)印。【眞言】香王菩薩陀羅尼經に説く。南謨曷喇怛娜怛夜也(namoratnatrayaya 歸命三寶)南謨阿離耶跋盧吉瓶說囉也(namo arya valo kitevaraya 歸命觀自在)菩提薩埵也莫訶薩埵也(odhi satvaya mahasattvaya 勇健大勇健者)南謨健陀羅尼囉社也(namogandharajaya 歸命健陀羅王)菩提薩埵也莫訶薩埵也(同上)伊只撥彌只撥底曼底(sarvatha sadhane mantri 希求智慧)薩婆頌他娑囉囉(sarvatha sadhane 一切義利成就)迦利沙般擊(kasa panda 誘引智識)地

錦迷(鉢喇拽叱)patyegu 助成(沙訶)svaha 成就。眞言中の健陀羅尼囉社は健陀羅囉社(香王)なるべし。【修法】増益、減罪に修す。同經云、此咒須至心誦十萬遍、然於觀世音像前作四肘方壇、取華等名香供養、夜用淨牛蘇然燈莫令斷明、其夜半咒師須起著淨潔衣、應好裝束、像前誦此陀羅尼一千八遍、至曉須了、不得昏睡、其日咒師自有人送錢財等物と。又別に大事を求めば、香王菩薩の像をかけ、一の大方壇と十二指の小方壇八箇とを作りて、佛・法・僧・阿彌陀・觀世音・大勢至・香王・諸善神等に供養し、好食果子香華を備ふ。萱薔華一千八莖を取り咒一誦毎に像の胸上に投ぐ、毎夜に起き斯く一千八誦すれば、人ありて錢財を送るに至る、その錢財は慳み積まずして利他に用ひ貧乏に施すべしと云へり。(香王菩薩陀羅尼經・祕鈔問答・別尊雜記・尊容鈔)

コウオウボサツダラニシユキヨウ

香王菩薩陀羅尼咒經

一卷、義淨、神龍元年譯。雜密經、菩薩部、香王法。略

して香王經と云ふ。陀羅尼・畫像法・行法を説く。樂震五・縮開十・日藏十二ノ六・大正藏二十。

コウオツ 甲乙

聲明音律上の用語。之に二あり。一は音律の順に據り低きより高きに及ぶ。二は音聲の高低に據り高きより低きに及ぶ(魚山精義)。聲決書には甲乙二音分別之事と標して委釋あり。

コウオツタクケンシヨウ 甲乙澤見抄

二帖或は四帖(甲乙二帖各上下)。抄或は鈔に作る。撰者未詳。一説には相應院三位僧都禪覺といふ。隨つて又示見抄とも稱す。蓋し示見は禪覺の片字なり。澤方相傳の諸尊法を類聚す。澤鈔十卷と大途同じ。目次下の如し。(甲之上)阿闍・寶生・阿彌陀・釋迦・藥師・佛眼・大佛頂・金輪・尊勝・光明眞言・後七日・孔雀經・仁王經・請雨經・法華經・理趣經。(甲之下)聖觀音・千手・馬頭・十一面・准胝・如意輪・不空縹索・白衣・葉衣・大勢至・延命・普賢・延命・五祕密・普賢・五大虛空藏・虛空藏・八字文殊・五字文殊・彌勒・大隨求・地藏・轉法輪。(乙之上)不動・同降三世・軍荼利・大威德・金剛夜叉・愛染王・烏樞沙摩・金剛童子・毘沙門・吉祥天・珠麗天・水天・地天・聖天・十二天・訶利帝・童子經。(乙之下)北斗・大北斗・本命供・當年星供・護持僧參内作法・地鎮・鎮壇・略念誦・南向作法・御加持・御衣木加持・神加持・浴湯加持・鉢作法・手洗加持・柴手洗、以上。寫本現流。

コウオツヘンオン 甲乙變音

天台聲明の三種變音・進流聲明の四種變音の一。↓變音・變音曲。

コウオロシ 神下

神分の異名。神分は本朝大小の神祇・冥道等を勧請して法樂を捧ぐるものなるを以て、神下と名け、神分の時打つ金を神下の金と稱す。

コウオンデン 光音天 Abhāsvarah

光音は色界第二禪極光淨天の舊譯語なれども、第二禪は言音なく光明を以て言語となすが故に、少光・無量光・極光淨の三天を總て光音天と稱することあり。玄法・青龍二軌には光音・大光音と並べ擧ぐるが故に、今の光音天は少光・無量光等なるべし。大日經疏五及阿闍梨所傳曼荼羅には、四禪天を東方梵天の眷屬中に列ぬ。



御室版曼荼羅の像

胎藏現圖曼荼羅には外院北邊に三位あり、玄青二軌によらば、光音は東、大光音は西に並ぶべし、而も古來梵名により相反して西なるを光音とす。胎藏圖像には外院の東邊に光音天衆あり、胎藏舊圖様には北方第三

軍に大梵天王と並びて名の知れざるもの三位あり、光音天は此の中にあるか。

【形像】主天は右手を腰にあて、含蓮花を持ち、左掌を立て、無名指小指を屈す。内側に侍せるは、右掌を腰にあて立て、無名小指を屈し、左掌を胸にあて、中指無名指を屈す。外側に侍せるは、右手を腰にあて、左掌を仰げて指端を前に向く。而して東寺曼荼羅・諸説不同記は外の尊右手に含蓮を持ち、御室版は内の尊左手に之を持つ。【三形】未開蓮。【種子】(ॐ)梵名の初字。又は(ॐ)世天の通種子。(玄法軌・青龍軌・諸説不同記・胎藏七集等)

コウガ 興雅 一三八三

安祥寺第二十一世。安祥寺宰相阿闍梨又は少將僧正と號し、藤原實博の息にして、安祥寺隆雅の入室瀆瓶なり。觀應二年權律師、延文二年權少僧都、同五年太元阿闍梨に補し、康安元年法印大僧都に任ず。嘗て鞍馬山に



興雅木像(安祥寺藏)

參詣して毘沙門天の靈夢を感見し、次いで安祥寺門主

職を嗣ぎ、應安元年權僧正に進む。翌二年恩師隆雅に大僧正の追贈を奏請して勅許を蒙り、同六年十一月勅を奉じて秘法を修し、後光嚴院の御惱平癒を祈願して法驗を顯す。爾來御敬信甚だ深く屢々優渥なる勅詔を賜ひ、徳風海内に高し。永和三年三月高野山寶性院宥快に安流の奥藏を皆傳して正嫡となす。是に於て安流は永く高野山に傳はり、益々その法燈を輝かすに至れり。至徳四年十月十五日寂す。壽缺ぐ。付法に宥快・成雅・興嚴等二十餘人あり。(傳燈廣錄下・安流大血脈・實語抄・野峯名徳傳下・山科安祥寺誌)

コウガ 叩雅 一六四〇

名古屋寶生院第二十四世。姓貫詳ならず、夙に根來山に學び、後豐山に移る。闍山師を能化職に補せんとせしが、性盛と争ふを快とせず、越前性海寺に退き、後尾州長久寺に轉じ、晚年寶生院に移り、寛永十二年吉田某の歸依を受けて觀音堂を建築す。師は性盛より中性院流の嫡統を承け、之を智山第三代日譽に傳ふ。これ智山に中性院流の傳はりし始めなり。寛永十七年七月十八日寂す。壽缺ぐ。(眞福寺列祖傳・新義眞言宗史)

ゴウカイ 泉海 一一八〇の頃

泉海方の祖。醍醐山金剛王院三世。初の名は豪海、治部卿僧都といふ。京兆の人、尙書雅兼の子なり。久安六年八月二十三日元海に従つて傳法灌頂を受け、治承四年八月源運に重受し、蓮花院を建て、別に一家風を樹て、泉海方と稱す。壽及び寂年を缺ぐ。付法に賢海・尊基・海淵あり。(血脈類聚記七・傳燈廣錄中)

ゴウカイガタ 泉海方

金剛王院流中の一流。金剛王院第三世果海を祖とす。同門雅西方に對する稱なり。當方は後代實賢の下にて勝尊方・勝圓方の二方を生ず。略系左の如し。



諸流秘藏鈔には勝尊を除き、實賢・道圓・覺智相承（實賢・覺濟・信尊の血脈を傍註す）の印信六通を載せたり。第一通紹文、第二通血脈、第三通傳法灌頂二印二明初金後胎、第四通秘密灌頂一印二明、第五通瑜祇灌頂一印一明、第六通相應經印信法性塔圖是れなり。三十六流印信類聚所載の勝圓方印信は五通にして第一通許可二印二明初金後胎、第二通傳法二印二明初金後胎、第三通紹文、第四通血脈なり。諸流印信所載の勝圓方印信は三十八通九裏にして、第一裏金剛王院内作業等六通、第二裏許可・傳法・血脈三通、第三裏阿闍梨位一通、第四裏〇〇二二通、第五裏瑜祇第二重四通、第六裏瑜祇訂二十五尊内作業・玉示法印二三通、第七裏秘經三重秘決・大日五相圖・非内非外三通、第八裏十二重・玉示五建立塔・蘇悉地訂二塔圖四通、第九裏瑜祇十二品十二通なり。次に編者相傳の勝圓方印信は四十通十裏にして、第一裏許可灌頂二通（印信一通・口決一通）傳法灌頂二通（印信一通・紹文一通）傳法灌頂血脈一通、計五通。第二裏金剛王院第二重、秘密灌頂一通・瑜祇一通・惣果秘密灌頂一通・一生成佛一通、計四通。第三裏金剛王院第三重、瑜祇灌頂一通・十五尊内作業灌頂一通・瑜祇一通・秘經三重秘決一通、計四通。第四裏金剛王院第四重、十二重大日灌頂一通・瑜祇五建立塔一通・蘇悉

地灌頂一通・金剛王院塔圖一通、計四通。第五裏内作業一通・瑜祇十二品引結水訂一通・佛舍利三十二粒事一通、計三通。第六裏阿闍梨灌頂一通・第七裏〇〇〇三種印秘決一通・〇〇〇相傳一通、計二通。第八裏大日五相圖一通・鐵塔大事一通・非内非外大事一通、計三通。第九裏瑜祇經十二品口決・瑜祇切文相承第一・瑜祇馬陰藏秘決第二・瑜祇阿闍梨位秘決第三・瑜祇胃地心秘決第四・瑜祇第五品秘決第五・瑜祇四攝行品秘決第六・瑜祇瑜伽成就秘決第七・瑜祇第八品秘決・瑜祇第九品秘決・瑜祇第十品秘決・瑜祇第十一品秘決・瑜祇第十二品秘決、各一通、計十二通。第十裏金剛王院指圖・印可壇樣一通、傳法灌頂大壇圖一通、計二通。總計四十通十裏なり。如上の三傳は俱に勝圓方印信にして、熟れも實賢・勝圓・廣海等と相承す。次に編者相承の勝尊方、勝尊・道圓・覺智相承）印信は六十八通九裏にして、第一裏初重、目錄一通・初重一通（許可印信・許可紹文・傳法印信・紹文・血脈を習ひ繼合せて一通とす）計二通。第二裏第二重、三寶院重位灌頂一通・三寶院灌頂大事口決一通、計二通。第三裏第三重・普通供養一通常受一通・心一通・三寶院三方一通・康曆記一通、計五通。第四裏第三重二、受五〇大土一通・三五完五〇大事一通・灑水口決一通・加持香水一通・五輪圖五通（内一通缺之）、計九通。第五裏第三重三、無題一通（但し内書の初に初重説所事・眞言習不同事・第二重説所事・眞言事・第三重異説習事・訂印明可觀行事・訂功能事と圖を釣りて擧ぐ）・異説相承人大土通、第三重異説一通・二界傳法阿闍梨印天長大事一通、計四通（當裏第二に六月抄一通を標すれども今の傳之を除けり）。第六裏第三重四、本地偈一通・本地偈亂脫乎覆在之一通・無言雜秘三寶院三重一通・貞治記一通・永和三重迎接院口授一

通計五通。第七裏第三重五我友之一通・厚雙紙訂條一通・六帖訂條一通・別記一通・三肝一通・最秘口決大治記一通・保延記定海一通、計七通。第八裏切出文・切出文大師一通・切出文秘決一通・瑜祇經口決云一通（無題内書初如此也）瑜祇口決序品三印一明大事一通・瑜祇十二品秘決一通・瑜祇訂口決一通、計六通。第九裏金剛王院秘決・瑜祇一通・瑜祇切文相承第一一通・瑜祇灌頂一通・秘經三重秘決一通（以上四通序品）瑜祇馬陰藏秘決第二一通・瑜祇阿闍梨位秘決第三一通・瑜祇胃地心秘決第四一通・瑜祇第五品秘決第五一通・瑜祇四攝行品秘決第六一通・瑜祇瑜伽成就秘決第七一通・瑜祇第八品秘決一通・瑜祇第九品秘決一通・瑜祇第十品秘決一通・瑜祇第十一品秘決（内作業品事）一通・非内非外大事一通・十五尊内作業灌頂一通・内作業一通・瑜祇（即身成佛自性不可得義）一通・以上四通第十一品内）瑜祇第十二品秘決一通・〇〇〇三種印秘決一通・十二重大日灌頂一通・〇〇〇相傳一通・鐵塔相承事一通・蘇悉地灌頂一通・後夜念誦一通・眞言宗一生成佛圖一通・許可灌頂金剛王院一通・無題一通、計二十八通。總計六十八通九裏なり。編者の相傳には別に金剛王院印可口傳一通一裏を添ふ。

コウキ 弘喜 一四六二
醍醐山光臺院大僧都。姓貫詳ならず、應永八年十一月二十七日同山光明心院弘鑣に従つて職位灌頂を受け、光臺院に住し法印大僧都に任ぜらる。同三十年瀉瓶の記を得。寛正三年六月九日寂す。壽缺ぐ。付法に弘典あり。（傳燈廣録中）

コウキ 弘基 一七五二
一八三二
智山第三十世。初は惠岳と稱し、俗姓菊入氏、越後古